

◎ヘンデル・フエステイヴァル・  
ジャパン2008

ヘンデル

《タメルラーノ》日本初演

（演奏会形式）

☆☆☆

タメルラーノ・山下敦子/バヤゼット・辻裕久  
アステリア・佐竹由美/アンドローニコ・波多野  
騎美/イレーネ・菅戸裕子/レオーネ・牧野正人  
指揮&チェンバロ・渡邊孝/管弦楽・キャンソ  
ズ・コンサート室内管弦楽団

ヘンデルの《タメルラーノ》  
は各幕1時間を越える3幕

構成のオペラだ。モダンな演出や華麗な装置に頼れない演奏会形式にもかかわらず、この長大なバロック・オペラの初演版ノーカット演奏が、最後まで聴衆をひきつけたことに、一種の感動をおぼえる。

タタールのタメルラーノ（チムール）がトルコを破って太守バヤゼットを捕虜にし、その娘アステリアを（自分には婚約者イレーネがいるにもかかわらず）妃に望む。しかしアステリアはタメルラーノの支配下にあるギリシャの王子アンドローニコと相思相愛の仲。物語はこの緊張感あふれる枠組みの中で進行し、最後は誇り高いバヤゼットの自殺という苦い結末はあるものの、主人公タメルラーノの「慈悲」によってハッピーエンドを迎える。

演技の楽しみがない分だけ、われわれの耳は音楽と演奏に集中した。ヘンデルの隠れた傑作と評されるその音楽の魅力を、渡邊孝指揮キャンソズ・コンサート室内管弦楽団のダイナミックな演奏と、まるでそれぞれの役柄にあつらえたような歌手たちのすぐれた歌唱が存分に伝えてくれる。最後に毒を飲んで自害するバヤゼットの怒りと執念が全編を通して重くのしかかってくるが、辻裕久の常でないドラマティックで格調ある歌唱は非常に説得力がある。山下敦子も低音部の表現力を生かしてタイトル・ロールにふさわしい立派な歌唱。高声で活躍する佐竹由美のみずみずしさも愛に純粋なアステリアにぴったりだ。波多野睦美（アンドローニコ）と菅戸裕子（イレーネ）はともに役を深く掘

り下げ、個性的なキャラクター作りまで楽しませてくれた。舞台を伴わないこの手の演奏会が一般にどれほどの練習期間をとるのかは知らないが、この2人に限らず、出演者全員が、おそらく初めて演奏するこの作品を深く理解し、大いなる共感をもって取り組んだのは間違いない。作品の評価を左右しかねない「初演」の重責を誠実に果たした快演だったといえよう。

(2008年12月6日)

浜離宮朝日ホール  
小畑恒夫